

一 此帳内 借借者 老を  
 言 借形 老 勿論  
 老 多し 老 小 裸り  
 流 足 以 以 人 を  
 流 取 取 可 可 縦  
 念 一 旦 利 潤 得  
 老 昌 昌 子 孫 必  
 の 小 欲 小 拘 拘 大

前回ご紹介しました、正司家文書の中に『永代帳』があります。  
 正司考祺（1793～1845）は絵筆屋とともに金融業も営んでおり、こ  
 の『永代帳』は貸付金台帳の性格と、子孫への申し送り書の性格を  
 持っています。



この中に「此帳内、旧借の者共実情なる者ハ勿論、極貧の者に猥  
 りニ済足（催促）いたし、人を潰シ取るべからず。縦令イー旦え利  
 潤を得ルといえとも、子孫必ス繁栄すべからず。眼前の小欲に拘れ  
 ば大利を失ス。聖人も小利を見る事なかれとのたもふ。尤、済足は  
 其人の好悪貧富、時のかけ引ニよるへし。殊ニ親の借し方杯ニ目を  
 耽て、金銀を取り立ル位にてハ出世はなりかたし。自身の身体を日  
 夜勞して金銀を儲くる事専用也。」とあります。

また、文政11年の「子年の大火」の記事の中には、皿山の難民救  
 済を詳細に記してあり、これらからは彼の商人道というものを知る  
 ことができます。今、世の中を騒がせているリクルート疑惑も正司  
 考祺のいう「自身の身体を日夜勞して金銀を儲くる」商人道からは  
 大きく逸脱しているようです。彼が存命ならばきっと嘆いているに  
 違いありません。

有田町歴史民俗資料館

# 皿山びとの歌 No.5

## 皿山の風物



### しめかざり 注連飾

「一年の計は元旦にあり」といいますが、皆さんは正月について考えたことがありますか。とにもかくにも正月はめでたいものさと言う人もいらっしゃるでしょうが、ここで少しその意味について触れてみたいと思います。

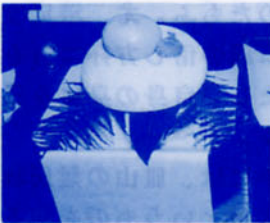
まず、正月は何を祝うのでしょうか。『民俗の事典』（昭和47年刊）によれば、「正月に家々にやってくるのは年神であり、トシという国語はもと稲の実りをさし、それから米作周期の一年の意味になった」とあります。このようにもともとは農耕とのつながりが深い年中行事の一つだったようですが、正月は年神様を迎える

家庭祭祀の機会といえます。

この年神様を迎えるため、まず門戸に注連飾（しめかざり）をかけます。これは禍神（まがkami）が内に入らぬようにとの意味があります。また、皿山の窯元の家ではたたらぎ（松薪で長さ一尺二寸ほど）の輪を使って門松を立てていました。今では全く見られませんが、以前は白砂（陶石を水ひしたあとに残る白色の粗粒子）を門松の根元に円すい形に盛り上げて飾ってました。これも年神様を迎えるための「清める」意味と思われる。

子供たちにとって正月の楽しみの一つであるお年玉も、もともとは一年の初めにあたり、より強い靈威にふれて靈の更新を図るため、家族の数だけ餅を出しておくものでした。年神様に餅をあげておくと年神様はそれを受け入れ、次にはその強大な靈威の一部を家族の一人一人に与えるというので、年神様の靈力をいただき、それによって人々は一年間の健康や幸福が守られると考えていたものと思われる。

さて、今年の正月のお年玉はこれでいこうと考えていらっしゃる人、あるかも知れませんね。でも、現代っ子には果たしてこの餅の靈力が通じるでしょうか。



### 食べものア・ラ・カルト

### 鏡餅

新年を祝う食べ物はいろいろありますが、特に餅は正月を始め節句、お供日など、家々の祝事や法事などにかかせないものです。

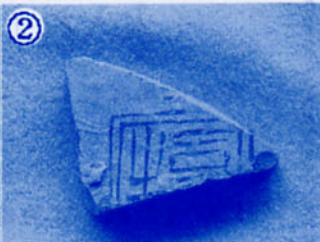
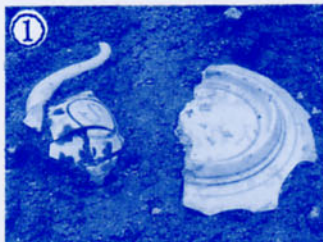
生米をついて砕いたり、ひいたりして粉にしたものを丸めた食品が糰（しとぎ）やだんごであるのに対し、炊いたりふかしたりした飯を押しつぶしたり臼と杵でついたりした食品が餅です。有田では、床の間に鏡餅、細工場・絵描き座などの道具にも餅を供え、荒神さんにもナマコ餅というナマコの形をした餅を供えます。現

在は食生活も豊かになり、さほどでもありませんが、以前は餅はおいしいうえに、大量についても保存が容易で、日本在来の食生活で最高の食品といえるものであったと思われる。

正月が過ぎて1月9日は荒神さんの餅を食べますが、その際、嫁入り前の女子には縁遠くなるので食べさせてはいけない、という言い伝えが残っています。

このほかに、小正月の前日の14日正月に黒牟田地区では、神様の飾り餅と白米とを一緒に炊いて、ホダレナという菜っ葉をのせ食べる風習が残っている家庭があります。これを「チカラモチ」といったりしますが、同じ「チカラモチ」でも南山地区ではノシモチを半紙に包んで水引きをかけ、去年男児誕生の家に贈る風習も残っているようです。

## 発掘レポート



- ① Sマークの入った輸出品
- ②古九谷様式の「青手」皿
- ③柿右衛門様式の中皿

赤絵町遺跡の発掘から Part 3

姿を現した

### 赤絵製品

いよいよ赤絵町遺跡の報告もPart 3までできてしまいました。もうこれ以上続けると別の発掘調査の報告ができなくなってしまいますので、一応今回は最後ということで、メインの赤絵製品について触れてみたいと思います。

#### 数千点の赤絵磁器片が出土

赤絵町遺跡ではまだ数えていませんが、だいたい数千点の赤絵磁器片が出土しました。最初は「赤絵窯はそれほど高い温度で焼かないから失敗品はあまり出ないのではないか」という声がちらほら聞こえてきたのであまり期待もしていませんでしたが、いざ試し掘りをしてみるとただただ唾然！！なんともううれしい期待はずれでした。

どれくらいうれしい期待はずれかというと、赤絵の製品は江戸時代にはかなりの高級品で、なおかつ輸出向けが多かったため、国内のそんなところの遺跡ではほとんど出土しません。せいぜい大名屋敷や公家の屋敷跡で数十点、といったところでしょうか。それが一度に数千点出てきたのですから、これで赤絵の研究が飛躍的に進むことは間違いありません。なにしろ、今まで国内よりもヨーロッパの方に資料が多く残っていて、なかなか手を出せない状況でした

「青手」古九谷様式の典型で、素地の白い部分を残すことなく全面に色を塗ったもの。

し、そういった資料も作られた時期のはっきりしているものはほとんどありませんでした。

今回は古い時代から新しい時代へと整然と堆積した層から出土していますから、江戸時代の各時期にどのような製品が有田でつくられていたか技術の変遷が一目瞭然です。これはけっして完全な形で残ってなくても破片で十分わかります。これが発掘調査をしている人が、一見何にもならないようなベンジャラギンを後生大事にせっせと集めている大きな理由です。

#### 古九谷様式から柿右衛門様式へ

今回の調査で分かった赤絵の流れを大まかに記してみますと、赤絵は一般に1640年代ごろに開発されたといわれていますが、まずはいわゆる「古九谷様式」と呼ばれている濃い緑色や黄色を多く使ったものや、濃い赤色を多用したものが作られたようです。しかし赤絵町の成立がおそらく寛文年間（1661～1672年）ごろですからあまり多くは出土しませんでした。赤絵町成立のころには引き続き濃い赤色を多用した製品が多く作られましたが、素地はいわゆる乳白手風のもが使われていました。こういった製品は主として東南アジア方面に輸出されたようです。

そのあと徐々に絵具も洗練され「柿右衛門様式」と呼ばれるものへと発展し、元禄（1688～1703年）前後には染錦が飛躍的に増加します。こういった製品の多くはヨーロッパに輸出され、現在多くの博物館や宮殿に收藏されています。その後も絵具は徐々に改良され、赤絵具は18世紀の終わりか19世紀の初めに光沢のあるはがれにくいものへと変わっていきます。

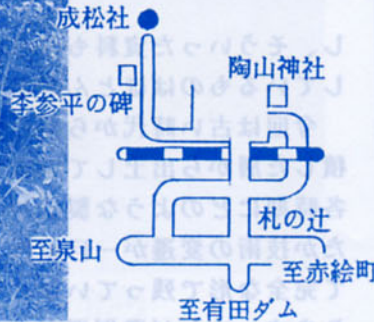
#### 出土品の特別展を予定

以上 3回にわたって赤絵町遺跡の概要を述べてきましたが、詳しくは来年度に発掘調査報告書を刊行する予定で、整理作業に励んでいますのでしばらくお待ちください。また、時期は未定ですが特別展も開催する予定です。

# 街角の歴史



## 成松社



陶山神社の上方、「陶祖李参平碑」があります。そこからさらに登って行くと「成松社」と記された石碑があります。ずいぶん風化してはいますが、その文字はまだ判読することができます。

有田皿山には江戸時代、正保四年(1647)初代皿山代官に任命された山本神右衛門に始まり、現在確認されているのは明治4年最後の皿山代官であった百武作右衛門までの41人の皿山代官がいました。この百武作右衛門の父が成松万兵衛信久です。

この文政年間の皿山代官、成松万兵衛は歴代皿山代官のなかで、特に景慕された人で、勤儉剛直で仁政をほどこし、公平に物事を裁決したといわれています。

例えば、有田は山間の僻地にあり、民の風習は荒々しかったようです。毎年祭りのときは、鉦や太鼓を演奏していましたが、その演奏の早い遅いによって必ず争いが起こり、治めにくい土地とされていました。万兵衛はある年、二つの村民を集め、庭をへだてて演奏させ、自分は中央にいて聞くことにしたが、争いはついに起こらず、その後も争いは二度と起こらなかったといわれます。

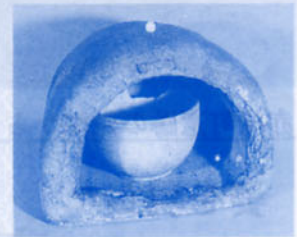
皿山代官は佐賀から赴任していましたが、万兵衛が任期を終え佐賀に帰るとき、皿山の人人はその徳を慕って石碑を建てたのが、この成松社です。

その後長い年月の間に風化して損傷がひどくなり、大正元年陶山神社の裏公園に新しい石碑が建てられています。碑は風化しても、成松代官の仁政は語り継がれていくことでしょう。

## 展示・収蔵資料紹介 薪焚

### 〔火入れ〕

冬の暖房家具には火鉢や炬燵(こたつ)などがありますが、これは「火入れ」、または「火箱」などと呼んでいました。まわりを反故(不要になった紙)で幾重にも張り付け、中に燵(おき)・炭火などを置いて手足を暖めていました。今の室内暖房から考えるとこれでどの位あったまっただのらうと思いますが、当時の人人はきつと、背を丸めてこれを使っていたでしょう。



### 濃み筆のつぶやき

早いものであつという間に一年が過ぎていきました。この一年は発掘に明け暮れた日々でしたが、不思議と病気一つせず、その体力に、もしかすると私はオバタリアンか?と思ったりしていますが、いやいやまだまだオバタリアンにはならないぞと自分に言い聞かせております。

真夏の炎天下から、みぞれの降る冬までの、8ヵ月間の発掘現場での日々は、仕事とはいえないなかなか厳しいものでした。考古学という一見ロマンの世界のように思われますが、現実にはスコップ片手に泥まみれの姿です。でも、土の中に埋もれている歴史を解きほぐしていくこともまた、とてもおもしろいものです。これだから止められないのでしょうか。

これから冬本番。室内では調査報告書作りに追われます。皆様もお体大切に。(葉)

## 有田町歴史民俗資料館報 皿山びとの歌 No.5

発行年月日 \* 昭和64年1月1日

編集・発行 \* 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地

☎0955-43-2678